



## 天空の神秘

## オーロラ

カーテンを激しく揺らすような……

たつぷりしたドレープのスカートをひるがえすような……

誰かを追いかけているの？

鬼ごっこするように

絶えず変化してひとときもとどまらない……

ステップするようであり……

ターンするようであり……

まるで美しいバレエの舞台を観ているかのように思える

その番組は、平成三十年の暮れも押し迫った三十日の夜の放映でした。

夢を見た後のように、興奮は冷めることなく私を捉えて離さず、一睡も出来ずに朝を迎えました。

それは自然写真家の田中雅美氏が、パノラマの微速度撮影をつないで三六〇度の動画として見せた、夜空に輝くオーロラでした。

オーロラは、太陽から放出される大量の電子が南極と北極の空に降りそそぐもので、地域によつては不吉な現象として恐れられていたりしますが、ローマ神話の暁の女神『アウロラ』に由来するという説もあり、神秘さに魅了される人が増えています。

不思議に静かで常に変化する、力強い生き物のように感じます。その様子が私の頭の中で繰り返し流れて、その神秘に魅了されました。

眠れずに迎えた大晦日も余韻に浸って、新年迎えの準備も、紅白歌合戦もうわの空でした。こんなに私を魅了したオーロラの感動を残したいと思いました。

押し花の野崎先生に相談して、田中雅美氏の写真集を参考にしながら夢の再現を目指しました。

私の興奮が少しでも皆さまに伝わることを願っております。

## 仕事を通した生き方

昭和三年生まれの私は、兵庫県立伊丹高等女学校三年生の時に学徒動員となり、終戦を迎えました。戦後の急速な欧米化もあり、もともと好きだった英語の必要性を感じ、事務のアルバイトをしながら必死に勉強しました。

英語力を生かして受けた、外資系の保険会社の試験にパスして、就職する事が出来ました。外国人ばかりの職場に、日本人は男性一人と私だけです。仕事の面白さにとりつかれて、わき眼もふらずに仕事に没頭しました。がむしゃらな性格で、英文タイプを打つ音は、「機関銃」と言われた事を懐かしく思い出します。

学生時代の得意科目の地理も活きて、海外の代理店の住所等もすぐに覚え、保険証書作成も出来る様になり、実力を認められてアメリカ本社勤務の話も出ましたが、当時は、やはり彼の地は遠く感じられ、日本を離れることはなく、

十年余り勤務しました。

そして、主人とはお見合いで知り合い、魅かれあつて結婚しました。仕事の転換を考えていた主人の右腕として、当時はまだ珍しいワーキングウーマンとなりました。気の抜く事の出来ない仕事の傍ら、主婦として毎日の家事や、本家としての様々な行事を必死にこなしていました。

その頃、昭和五十年代の営業回りは、今は皆が当たり前のようにゴロゴロとひいているキャリアバッグもなく、商品のサンプルの詰まった大きいカバンは、両手がちぎれるほどの重さでした。東京へは始発の新幹線でした。昼食もそこそこに、得意先を回りました。帰りの新幹線では、快い疲れと達成感をかみしめていたのが懐かしいです。

十七年間で国内に四工場建設して、製品流通の拡充を図り、経営を強化しました。二人で力を合わせて頑張ってきましたが、昭和六十年に主人は五十九歳で旅立ってしまいました。悲しむ暇もなく、主人に代わって社長を引継ぎました。営業はともかく、財務を極めようと、夜はビジネススクールで簿記を習い、経営者としての高みを目指して頑張りました。

平成元年に本社ビルを新築し、後に残す地盤になることで安堵しました。平成五年に六十八才で社長を引退し、会長職になってから、中国での工場の計画の際には北京語を習い、先方との円滑なコミュニケーションを図りました。

自分でも呆れるほど走り回りました。健康な体に産んでくれた両親に感謝しつつ、クタクタな筈なのに、充実感で嬉々として働きました。その時代を駆け抜けて行ったんだと、しみじみ思い返しています。